

やっぱい、ロリっ娘は最高だぜ！！

だーいっちゃん♡

お兄ちゃん

アダルトDVD
ユーザーを見てた
ろりっ娘に人オブラ

CG版



私…大人になったら…こんなえっちな事、

この女の人、こんな格好してるのに

好奇心旺盛！

活発な今時の女の子★

春野芽吹

しちゃうのがあって

大空ひかる

内面的なおっとりさん♪

気持ちよさそうな表情してる…

「いい天気ー」

「ホントだねー。暑くも無く、寒くも無く、お出掛けには最適な天気だよ。こんな天気いい日に学級閉鎖だなんて、病欠の人は損してるよね」

学級閉鎖と知らされたのは、学校に着いてからだった。



「もっと早く伝えてくれたら、朝寝坊出来たのにね」

「まあ、いいじゃん。お陰で平日の昼間からノンビリ散歩出来るんだし」

心なしか、少女の声は弾んでいる。

予定外の休日と、最高の天気に

ウキウキしてしまう気持ちはよく分かる。

「こんな時こそ、普段行けない街を、ゆつくり見て回るチャンスだと思うでしょ？」

「うん。普段は、なかなか隣町まで行かないもん。確かにいい機会かも」

「あ、みてみて。あんな所にレンタルショップがあるよー」

「…あだるとでいーぶいでいー…めぶきー。アダルトDVDって、何？」

「そ、そりゃーアダルトって言うぐらいだからー」

大人専用のDVDなんだよー」

「あー。分かった。怖いDVDとか、年齢制限してるヤツね」

「私、怖い映画とか大好きなんだよねー」

「私は苦手だよー。ムリムリムリー」

「ねー。ひかるうー。一緒に観ようよー。過激なホラー」

「だ、だめー。無理だよー。怖いもん」

「じゃあ、あのお店に入ってパッケージとか見てから決めよー」

「えー？あのお店、大人専用なんでしょー。入れないよー」

「大丈夫だって。注意されたら店の外へ出ればいいんだよ」

「こーゆーのって、しゃかいけんがく…って言うんだっけ？」

そういえば、社会の宿題で『街のお店について調べてみよう』って有ったなあ。お店に入ってみるのもいい機会かも。

もし、『大人専用だから』って注意されたら、

社会見学の宿題だからって言えば、色々と見せてくれるかもしれないし。



「うわあ。中は結構広いだねー。沢山のDVDが置いてあるよー」

自分たちが入ってきた入り口を見ると、スモークフィルムの貼ってある自動ドア越しに、外の風景が若干暗く見える。これならマジックミラーと同じで、外から店内はのぞけない。店内に誰が居るかなんて見えないようになってるんだ。いわゆる『ぶらいばしー』に配慮したってやつだ。

ここから先の店内は『大人の領域』らしい。何だか別世界に入ってきてしまったような感じだ。

「なんか…店の中に入っちゃえば、普通のレンタル店と変わらないね」

「店の奥はどうなってるのかなあー？」



「ゲームがあるよ。芽吹はこーゆーの好きでしょ？」

「うん。まーね。後でちよつと遊んでこようよ」

とりあえず今は『社会見学』が先だ。

カウンターには誰も居ない。

おかしいな。24時間営業って書いてたのに。
カウンターのの上には…

『ご用の方はこのベルを鳴らして下さい』と書いてある。

「なんだー。この時間はあんまり来ないのかなー？」

これならジツクリ店内を見学しても

平気みたいだね。緊張して損したよ」

店員さんは奥の部屋に居るらしく、店内には居ないようだ。

よく見ると、店内のあちこちに監視カメラが有る。

何か有れば店員さんが出て来るのだろう。

店内が無人と分かったら、私の緊張も解けた。

「うん。安心した。それじゃあ、どんな商品が置いてあるのか

社会見学開始しよー」

どんな作品があるのかなー。

ワクワクしながら棚を見ると…

芽吹とひかるが、店内散策を始めた時と同じ頃。

俺は眠い目を擦っていた。

昨日は遅くまでネットゲしてたせいで、完全な睡眠不足だ。

幸いこの時間、この店は来客なんて殆(ほとんど)無い。

24時間営業はオーナーのポリシーらしく、お陰で暇な時間でも、こーやって俺みたいなヤツがバイトする事が出来る。

このバイト見つけるまでは、職を転々としてたが…
やっと落ち着く事が出来た。

何の取り柄も無い俺の唯一の趣味は、エロ動画サイトの閲覧だ。
AVで蓄積した知識は、かなりの自信がある。

そんな話をネットゲの知人にしてたら、この店のオーナーが
声を掛けてきたって訳だ。

ニートからの華麗な脱出を遂げた俺は…

堪能なAV知識を武器に、位置に依る事オーナーの代わりに発注や、
経営方針まで口出し出来る立場になった。

「ふあああーっ」

俺は、本日数十回目のアクビをすると、店内の監視
モニターに目をやった。

異常なし…と…

不審者発見・即通報

…ん？

一瞬目を疑った…

棚に隠してあるカメラに映っていたのは、アダルトDVD店舗に相応しくない『少女』達だった。



「ひかるう。な、なんかへんな気分になってきたあ……んっ……
私……大人になったら……こんなえつちな事、しちゃうの
かなあって」



うー。駄目だ…もう我慢出来ない。

ココで変な事して騒がれたら、明日の新聞に載っちゃうし…
でも、辛抱する事も出来ないし…

やりたいやりたいやりたい…

俺の底なしの欲望が、理性を凌駕した。

どうせ、この時間…店には誰も来ないだろうし…

万が一誰かが来ても、事務所に連れ込んでしまえば、
目撃される事も無いだろう。

今撮った写真と、こんな店に迷い込んだ事で(脅くおど)かせば…
色々出来るかもしれないな。

俺は早速行動を開始した。

俺は少女達が居る通路へと移動した。



「何すれば…いいんですか…?」

「そうだなあ。そのパッケージと同じように、俺の「コ」をしゃぶってもらおうかなー」

「ちよつと…それは…ひかる。どうする?」

「私…そんな事…出来ない!」

「出来ないなら、社会見学にならないな。それじゃー、

不法侵入って事で警察呼ぶことになるけど…」

「それは…困ります」

「俺はどっちでもいいんだぜ。ただ、早く決めて貰わないとなあ」
2人は顔を見合わせ、覚悟を決めたようだ。

「わっ…分かりました」

「よし。いい子だ。それじゃあ、(跪ひぎまづ)してもらおうか」

「それで…マッサージって一体、どうすればいいんですか？」

「それじゃあ上脱いでもらおうか？」

「えええ。それは…恥ずかしいです…」

「ひかるちゃん。俺はね、こんな店に勤めてるから、

女性の裸は見慣れているんだよ。だから恥ずかしがる必要なんて

全然無いんだよ」

「お医者さんに…診せるような感じなんですね。分かりました」

そう言つて、ひかるは上半身を露わにした。

俺はソファに腰掛け、ヒザをポンポンと叩いてみせた。

「さてと…」コに乗って「らん」

「は…はっ」

不審者発見・即通報！



逃げられないように片手を(掴/つか)み、もう片方の手でひかるの股間を、
下着の上から(撫/な)でる。

「あ、そんなトコ、触ったら…ダメです…ん…んくうっ！」

少し触れただけで、ひかるはビクンと反応する。
かなりの感度だ。

若干の抵抗をしてるが、足は開いたまま俺の指を受け入れてる。
下着の上からでも、俺の指先に適度な(湿/しめ)り気を感じられた。

ちゅく…くちゅ…

不安そうな表情だが、頬は紅潮し抵抗する力も弱い。これから起こる事への、
期待と不安が入り交じったといった感じか？

「あれ？ひかるちゃん、ココ…濡れてない？おもしろいのかなぁ？」

「ちがっ、ちがいますっ！んっ、んあっ。おもしろなんてしてませんッ！」

「じゃあどうして、ココがこんなに濡れてるのかな？」

俺は指先を上下に動かし、湿度の高い布に、さらに液体を染みこませる。



ゼツ

「やっ、そんなにしないで。んっ、んはあ。濡れてなんかいいいです...
こ、これは...ん。ひゃうっ！あ、あ、汗なんですっ！んっ、んはあっ！」

「ホントに濡れてないの？どれどれ？」
パンツをズラして、指先で秘所に触れると...



ビクンっ！

ひかるちゃんの体が、大きく反応した。

2発も(射精ぐだし)たばかりなのに、俺の性欲は高ぶったままだ。

無理も無い、ここ数年女性と話しても居なかったこの俺が、
今は処女の少女を陵辱しまくってる。興奮しない訳が無い。

「めぶきちちゃんお疲れー」

「あれ？ひかるは？」

「マッサージ終わって、今はグッスリ休んでいるよ」

...

「それよこも...」

